

「史的」  
重要事件、  
家族・知友、  
学歴

年譜の同譜向屋

歴史的な事件  
を表物として

年号	数	歳	職歴(講義)
一八八五 (明治一八)	一	一	三月十四日 山形県酒田町船場丁百九十番地に生る。父は某吉、母は里江。祖父は金茂、一祖母は志賀。
一八八六 (明治一九)	二	二	父を失う。 妹(名代)生る。
一八九〇 (明治二三)	六	六	酒田尋常高等小學校に入る。 再婚し、母は父の家となる。私は祖母の許にい成人す。
一八九一 (明治二四)	七	七	日清戦争の時、一月酒田地方に避難。家は公安なりの学校を潰れた。
一八九四 (明治二七)	一〇	一〇	この年同級の担任は和島興之助先生となり、 と申す病弱なり。酒田同業會館に在りて
一八九六 (明治二九)	一二	一二	化学に興味をもちおぼえ実験にほめて代考を志す。
一八九七 (明治三〇)	一三	一三	化学の興味をもちおぼえ実験にほめて代考を志す。
一八九八 (明治三一)	一四	一四	三月 酒田小學校高等科四年生卒業 四月 在野にある山形県立林校の中學校に入る。 祖父の留守中、
一八九九 (明治三二)	一五	一五	八月 赤痢にかかり即ち一月まで療養す。
一九〇〇 (明治三三)	一六	一六	化学、物理を専攻し、数学、英語の外は、殆んど他の学理を學ばず。 三月(祖母の理解の下に)祖の許に可を得ず。 林校中學校を卒業し、今日の上京し、東京理科大学に入る。今日の東京理科大学。
一九〇二 (明治三五)	一八	一八	物理學校に通学。傍ら、一年間ドイツ語を学ぶ。 カタルを患った。物理が林校師又草木或は先生の感化を受けた。
一九〇三 (明治三六)	一九	一九	

伊藤吉之助君と同輩に  
本國の事

今日の東京理科大学



一九〇四  
(明治三十七)

日露戦争の終結  
物理学科に通学の停り、九月から  
大成中学校 五年級へ入学す。

東京物理学校校長就任  
東京物理学校校長就任

一九〇五  
(明治三十八)

二月 東京物理学校全科九十考の  
三月 大成中学校 卒業  
五月 父督を相続す。

父督を相続す

一九〇六  
(明治三十九)

四月 御里に帰る。  
父督を相続す。

父督を相続す

一九〇七  
(明治四十)

五月 眞美生る。  
父督を相続す。

父督を相続す

実験を要(さい)

十一月 東京物理学校校長就任  
父督を相続す。

父督を相続す

一九〇八  
(明治四十)

この年、東京物理学校校長就任  
父督を相続す。

父督を相続す

一九〇九  
(明治四十二)

九月 父督を相続す。  
父督を相続す。

父督を相続す

一九一〇  
(明治四十)

二月、上海、東京物理学校校長就任  
父督を相続す。

父督を相続す

一九一〇  
(明治四十)

十月より 父督を相続す。  
父督を相続す。

父督を相続す

一九一〇  
(明治四十)

父督を相続す。  
父督を相続す。

父督を相続す

単行本

母は知事の子で有純氏あり、その方の方と共い

妻子共い

コーリーの凝集判定条件について

一九二一  
(明治四四)

林鶴一先生

三月末 物理学校を辞し、仙台に舞移  
四月 東北帝国大学 物理学助手  
八月 東北教授雑誌を創刊し、このより  
一九二七年の春まで、その編輯を手付った。

「東北物理学」

一九二二

(明治四五、  
大正一)

二八

一月 祖父を失う。  
八月 酒田より引上りの準備のため  
郷里に帰る。

「教物理学」における任意の者の  
表現について (東北物理学)

車校より

一九二三

(大正二)

二九

三月 研究を著した。  
四月 臨時教員養成所講師を嘱託  
された。本学への講義は代教  
した。祖母と酒田を引上げ、仙台にまっ  
同居す。  
このころ東北帝国大学に田田元氏  
を知り、

「ローレンツの電場について、並いた若干の  
方向の的解」 (東北物理学)  
二月 「ルンギエの符号の符号学」 月刊行  
「ローレンツの電場について、並いた若干の  
方向の的解」 (東北物理学)

この春母の整理のため祖母と共々帰省した。

一九二四

(大正三)

三〇

臨時教員養成所 本学への講義を  
代教、このころ 志望研究を理した。  
のほかに (東北物理学)

八月 「ガミオン解析」を刊行  
月刊行

〇八月 第一回世界大会開始

一九二五

(大正四)

三一

四月 東北大学の授業を嘱託  
本学への講義は 代教解折。

三月 「ルンギエの符号学」 第二巻  
月刊行

十月 保存力場における経路と  
学位論文 (東北物理学)

「保存力場における経路」 (東北物理学)  
「一元二次式の若干の定理」 (東北物理学)  
「直線群の幾何学」 (東北物理学)  
「及野の微分方程式」 (東北物理学)

一九二六

(大正五)

三二

本年東北大学の講義は 射影幾何学  
八月 理学博士の学位を受く  
テモクローニ (東北物理学)

「柳原善太郎氏」の著作の整理  
「東北物理学」の書物は  
「東北物理学」の書物は

労働問題

この頃  
日米  
恐慌  
を  
社会主義的研究  
より早く感得する

一九一七  
(大正六)

三月末 仙台から大阪に轉じ、  
大阪府池田町(今の池田市)に住  
んだ。

四月 大阪医科大学を退学し、理研  
の助手を兼ねた。  
五月 塩化理化学研究所の研究を  
やり、創業の性味を味う。

「曲面の描寫の理論」(東北巻)

「文藝者の内面的批判」(改訂の稿)

「管見力言の藝術史的研考」(東北巻)

「空間の形を具法に連結  
の理論」(東北巻)

一九一八  
(大正七)

三月四 大阪医科大学の課程を改正した  
八月 半醫學専攻を退学す。  
十月 第一次世界大戦終結

五月 「ブーネ」初巻代巻(武田邦衛氏  
共訳)刊行

五月 物理学援同窓会「物理学」理論  
数学と実用数学との交点

「不可逆力場の力学経路」(東北巻)

「位相空間の理論」(一)

「エニテリク」由中の理論」(一)

一九一九  
(大正八)

十二月 神戸を帆、フランスに向った

一九二〇  
(大正九)

一月 パリに到着。パンテオ  
ンの側に住む。八月まで専らマ  
ニス語を学ぶ。  
三月 九月 ストラズブルの国際数学者大  
会に出席した。

ボレル、カレル、アガマルの講  
義を聴き、アガマルの「幾何学」  
を著す。

相対性理論を研究す。

カレルの「幾何学」を著し、アガ  
マルの「セミナール」に出席す。

十二月 マルセイユを帆、伊国に送らる。

一九二一  
(大正一〇)

帰国ノ寸前

一九二二

(大正一一)

三八

一月 大阪医科大学の臨時講義  
研究の仕方を述べた。

四月 大阪医科大学の臨時講義を  
めた。

六月 東京物理学校で  
「回分算の回分表」を  
講じた。

二月 アイニシタインの特別講義を  
行つた。  
三月 大阪府立女子師範学校で  
「回分算の回分表」を  
講じた。

「回分算の回分表」の  
講義

(大正一一)

三月 日本教育学会で  
「回分算の回分表」を  
講じた。

一九二三

(大正一二)

三九

七月 東京物理学校で  
「回分算の回分表」を  
講じた。

十一月 大阪府立女子師範学校で  
「回分算の回分表」を  
講じた。

三月 「回分算の回分表」  
刊行

七月 日本教育学会で  
「回分算の回分表」を  
講じた。

一九二四

(大正一三)

四〇

この年を中心として、大阪府  
立女子師範学校の臨時講義を  
行つた。

三月 「回分算の回分表」  
刊行

「回分算の回分表」の  
講義  
「回分算の回分表」の  
講義  
「回分算の回分表」の  
講義

一九二五

(大正一四)

四一

六月 塩見理化研究所長を  
兼ねた。

六月 「回分算の回分表」  
刊行

この年より肺内淋症の  
治療のため、  
半年以上入院した。  
毎年冬になると、寒  
風が吹くたびに、  
咳が出るようになった。

「回分算の回分表」の  
講義  
「回分算の回分表」の  
講義

健康の目立って衰へて来た

一九二六  
(大正一五・昭  
和二)

四二二

療養生活  
一月 堀見政次氏研究所事務長に任じられた。  
五月 大阪医科大学 外科教授に任じられた。

この年から教壇内  
「教育教育」の著書  
の編輯(中)に  
に従う

六 病内

一九二七  
(昭和二)

四二三

療養生活

この年から

一九二八  
(昭和三)

四二四

健康を回復す

この年から 数学史に興味をもつようになった。

「近藤啓氏共訳」

「初等数学史」

「井中甫内氏共訳」

「算術の社会性」(中)

一九二九  
(昭和四)

四二五

一月 祖母を失う。四月まで病床にあり、  
数学史の研究を始めた。  
九月 祖母の遺骨を収められた。神代村の用事  
三木清氏を知る。

「算術の社会性」(中)

「階級社会の算術」(中)

一九三〇  
(昭和五)

四二六

日本数学史料の蒐集を始める  
この秋 戸坂潤氏を知る。  
春 島田文理科大学に「数学史・数学教育学」  
を講義した。

「階級社会の算術」(中)

「改訂社会の数学」

「数理統計」

一九三一  
(昭和六)

四二七

九月 満洲事変起る  
大正帝国大学 理学部南校(この年 満洲  
唯物理研究会)に所属する  
藤森良蔵氏の「日土大学算学会」を  
物方史を編む。滞在中、  
中国数学史料の蒐集を始めた。

「日本算学会」

「中国数学の社会性」(中)

「数学教育の改訂内」(中)

一九三二  
(昭和七)

四二八

この年より 和算の中国における研  
究を始めた。

「中国数学の社会性」(中)

「数学教育の改訂内」(中)

至る所、おたまたま、  
之の海氏を記す。

一九三三  
(昭和八)

四二九

この年より 和算の中国における研  
究を始めた。

「中国数学の社会性」(中)

「数学教育の改訂内」(中)

一九三四  
(昭和九)

五〇〇

この年より 大正を記す。和算を  
「実用算術」(共)の  
新田文相による 文部教育防止の  
と志す。

「実用算術」(共)

若者のままと科学史の研  
究会を創った。

一九三五  
(昭和一〇)

五二  
本年また大塚大士の遺稿には統計法  
(ア)と(イ)の防止のため新編の「統計学」の  
父の五十年忌を御里に於て行つた。

「林鶴一先生追善会」

「二・二六事件」

一九三六  
(昭和一一)

五二  
本年また大塚大士の遺稿には「日本における  
近代的教育の成立」を講じた。

「自然科学者の任務」(中心)

一九三七  
(昭和一二)

この秋から

五三  
三月 協賛 第一生  
三月 協賛 理化学研究所長に辞す  
本年また大塚大士の遺稿には「科学の精神と教育」  
六月 東京 杉並区馬場に移住す  
七月 日華書局にて出版した。

「科学の精神と教育」

一九三八  
(昭和一三)

五四  
春秋二回 大塚大士の遺稿に於て(官用  
所折)の「科学史」  
時局のため、若者教育のため、大塚大士に  
に盡力した。

「日本教育の特殊性」(中心)  
「封建教育の滅亡」(副題)  
「中国教育の特殊性」(研究)  
「現代日本の科学史」(中心)  
「科学史の概観」(中心)

一九三九  
(昭和一四)

五五  
五月 国民学術協会の会長となる。  
五月 東京物理学校理事に当選せ  
る。尚、大塚大士に辞す。

五月 ノモンハン事件 起る。  
六月 第二次世界大戦 勃発す  
大塚大士の遺稿には「春は病休のため休む」と、  
秋に「西洋教育史」を講ず。  
六月 酒田から帰る。母を連れて帰  
京した。(母は九月まで滞在)

十月 日本教育史の補遺を出版す(共  
編成)

「日本教育史」の補遺を出版す(共  
編成)



一九四〇  
(昭和一五)

五六

春「大阪大学講義」中国教學史  
秋「計算回表」刊行

三月「日本の教育」刊行

一九四一  
(昭和一六)

五七

三月 瑞信三生  
四月 日本科学史学会成立 顧問となる。  
五月 大阪大学講義「統計学」  
五月 大毎文化講座「若者の日本的性格」  
同 中央教育委員会 準備委員 長  
七月 若回委員会 閉会  
八月 旅行回数のため 總會を 閉止  
国民生活協会 理事 となる。国民生活  
学院の 経営 へ 参加  
日本書院文化協会 圖書 整理 委員 となる (八月 開始)  
二月 太平洋戦争 勃発。このころから  
明年 三月 まで 病臥

四月 現時局下に於ける 科学者の 責務 (中心)  
八月 「日本科学の 展望」刊行  
主として 工業

一九四二  
(昭和一七)

五八

四月中旬より 熱帯病のため 慶應病  
院へ入院した  
九月より 年末まで 胃腸過多症  
かかす。  
秋 大阪大学の 講義「日本教育史」  
この一年は 病氣と 物理学 校の 用務  
で 疲弊 して 送ってしまった。

四月 明治時代の 教育 (岩波の  
日本 年報) 刊行

一九四三  
(昭和一八)

五九

春 大阪大学「計算回表」を 編む。  
夏 後 講義を 辞す。このころから  
八月 末に 慶應病 院へ 入院した。

四月 国民生活協会 での 講話「戦時下  
における 教育 行政」

改戦の色濃みの  
たうたうの  
一九四四

六〇

一月 東京物産 校 理事 となる。  
二月 幹事を 辞した。  
この年より 南無 校で 物理学 校の 用務  
のため 空しく 送ってしまった。  
二月 戦争の 経過を 思い、白紙 改定 交渉  
論文の 整理をした。  
八月 一五 浦田 寺の 正傳寺に 疎開

二月 「戦時下の 教育」刊行  
この年「国民生活協会」にて 中野 正  
治 社長の 講演 があったが、  
同社 解散のため 創立 社 解散した。

三省堂 疎開の ため  
たうたうの

一九四五  
(昭和二〇)

六一

二月末より気管枝炎を病み、病床に  
満六十歳を迎えた。

七月末 浦田清清に「梅浦」指下した。

七月 学童疎開、大分、山形、西田川、  
神浦村、黒森に疎開した。

八月 浦田清清「爆撃」序言  
八月 浦田清清「爆撃」序言  
八月 浦田清清「爆撃」序言

十月 黒森より浦田清清十日堂前に  
移す。

十一月 母を失う。自定

十二月 東京に帰る。

一九四六  
(昭和二一)

六二

一月 民主主義科学者協会成立し合  
長に推さる。

三月 藤由理子生。

三月末 放送協会会長に推され  
大分、辞す。

五月 胃潰瘍を患ふ。

七月 戦争調査局参事となつたの  
向い、早く解散となる。

一月以来 自著「教学論文を整理す。

四月 「自然科学者の文庫」(世界)  
七月 「科学者と民主主義」(中公)  
十月 「科学者を歴史上における」(白鳥)  
十一月 「科学者の『史的基礎』」(改訂)  
十二月 「科学の指標」刊行

一九四七  
(昭和二二)

六三

四月末 「明治の学問の基礎」(改訂)  
七月 急性肺炎にかかると。  
七月 民主主義文化連盟の常任委  
員に推さる。

七月 学術体制刷新委員の当選を  
受け、急性肺炎を患ふ。

二月末 急性肺炎を患ふ。

一月 「明治時代の学問」刊行  
五月 「ガリシニ堂用紙学政」刊行  
二月 「科学史研究」第二輯刊行  
二月 「科学者の記録」刊行

一九四八  
(昭和二三)

六四

二月 急性肺炎を患ふ。六月  
になり、おとやくが肺炎を患ふ。  
四月 日本科学史学会会長の推さる。  
一月 下旬より寒風のため年々ま  
つて、病床

五月 「ガリシニ堂用紙学政」刊行  
二月 「科学史研究」第二輯刊行  
二月 「科学者の記録」刊行

一九四九  
(昭和二四)

六五

二月 文化連盟の責任ある地位を  
去る。  
二月 東京理科大学(物理学科)  
理容心会長の推さる。

二月 「科学教育の刷新」刊行

第三回 (1949.7.29)

帝大化子種の没帯、  
図書、

法経会 (コロキニ-4)

学問的雰囲気 — ニュートニ 絵 { 中川 隆吉 Steiner  
田丸 卓子 日本中ニ-マ子

官学と私学 [私学 / 学問 ~~の~~ 自由] (私学?)

私学が長所を有する?

~~私学は長所を有する~~

三上 幸夫

1906 (明治39) 22歳

2月上旬より ~~病~~ (悪性の胃病) (退かぬ病)

祖父の病气 (65歳)

家業の衰

[河上 隆、無我苑 に入る]

●学問の研究 ●は 家業の傍、一里の距離をこえて やめる 90分

四 月 ~~の~~ ~~病~~ ~~を~~ やめ ~~て~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~す~~ ~~。~~ ~~大~~ ~~学~~ ~~を~~ ~~や~~ ~~め~~ ~~て~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~す~~ ~~。~~  
すみと共々、御里へかへる。 ~~既~~ ~~に~~ ~~か~~ ~~ら~~ ~~は~~ ~~橋~~ ~~を~~ ~~こ~~ ~~え~~ ~~て~~ ~~上~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~す~~ ~~。~~  
のつたう、暗く なったので、古口の宿に一泊す。 ~~食~~ ~~を~~ ~~と~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~す~~ ~~。~~  
八月 ~~の~~ ~~奥~~ ~~の~~ ~~味~~ ~~味~~ ~~液~~ (雪の深い) へ 出た。

家業の不振 ~~は~~ ~~私~~ ~~の~~ ~~中~~ ~~学~~ ~~時~~ ~~代~~ ~~の~~ ~~幸~~ ~~に~~ ~~比~~ ~~し~~ ~~て~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~す~~ ~~。~~  
帆船の取扱 保険の取次店

回 ~~増~~ ~~学~~ (本格的) ~~と~~ ~~私~~ ~~人~~ ~~と~~ ~~共~~ ~~に~~ ~~近~~ ~~い~~ ~~に~~ ~~な~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~す~~ ~~。~~ ~~後~~ ~~進~~ ~~的~~

[ニモン (北地), 塾 (カキヤツカ 漢学) 投機的!]

日露戦争終結 へ 出

5月 ~~の~~ ~~使~~ ~~庫~~ ~~を~~ ~~新~~ ~~しく~~ ~~回~~ ~~修~~

6月 26日 しま (近所すみ) と 新橋

家業を見る。 [田地も多少あったので、夏の世 へ 見えて 回す?]   
不在 地主的 へ 見

相方明もあり、冬期には読んて用が、~~...~~

今更持った大科学書で、読みなかつたものを読んで、~~...~~

科学の「宇宙の正」や 丘 理太郎「進化と人」

科学雑誌の「進化と人」の紹介もこの頃から始め

その時、~~...~~ 青山堂 (堀美代治さん) 小説の書も読み、

この頃は、今更に私の読んていたもの。 [北条の「冷色板又」、小室凡堂  
も「読んては、~~...~~ 人いいた]

夏月 櫻井「わが昔は猫いあり」、「坊ちゃん」、「草枕」  
長石川 二重「その面影」

家族制交・家世の ~~...~~ 封建性  
—— 家世の封建性 ——  
内肉の研究、~~...~~ 不塔

社会批判、人肉解放、交遊の精神

自然主義の文芸

獨歩 「獨歩集」、「運命」

信長 藤村 「研戒」

しかし科学の研究心を捨てることは出来ず、~~...~~ 獨歩  
の無知か、お尋ねの如いよか?

11月 東京の如い、林鶴一先生の指導と音見を ~~...~~

自分の 林先生の印象 (当時34歳)

- 1873 (6)
- 1897 (30)
- 1898-99 (31-32)
- 1899-1901 (32-34)
- 1901 (34) 11月

明治大学の ~~...~~ 臨科  
から4年

同由 培地  
教育界の  
活躍に  
いた

東大 専任科 (塾) 講師、講師  
京都大 理工科 助教授  
松山中学校 嘱託

東京高師 講師 松の自由 (1906) 11月

1907 (40) 高師 教授

この時に  
接した著  
者の物  
達

企劃性  
に著した

批評  
3年の難

快加  
協定

著者の或人  
男性的の人

家世の二元論、~~...~~ 著者の人々の決まりきった  
研究の二元論、~~...~~ 著者の人々の決まりきった  
研究の二元論、~~...~~ 著者の人々の決まりきった

青年の友 といふ感じ、<sup>私は</sup> ええついでに、 岩字をやったのよ!

1907 (明治40) 23歳

五月 ~~長男~~ 長女が生まれた。

群論, 函論, 微分積分

Euclyd. d. math. Wiso.

~~Math. Wiso (数学の科学)~~  
帆船の一艘を改設した。 (1) 一艘は洋船、  
もう一艘は和船。  
家業の将来についての疑問。

これは ~~冒険~~ 冒険的企業であると思はれる!

家におるときは 青山堂で文房具をこき、  
家業の手付けをする。  
樟材「書」、田山花袋「捕鯊」。

<sup>私は</sup> 林先生の みどりよ に捕らされた、先生の 雅魔 まんをのぼせ、うさぬて

しかし車窓の下宿のお日は、岩字の勉強に専念した。折紙と林の岩字だけには基礎が生まれておるので、困りはなかった。

折紙を受け、

大が法み した。共々には、日を運った。

そのお里では

岩字は 近代的な基礎の材料を考へて

集みとす所は 「折紙と林の折紙」の寄書であった (これは <sup>手付け草稿のよほど</sup> 手付け草稿のよほど)

1908 (明治41) 24歳

1月 東京岩字折紙の会の会、慶女論文「二つの級とを掛った、回りの曲のついで」(英文) を発表。これは林先生の おの かけ、英文を直にいたったもの。

~~しかし~~ 容易に 岩字者として、<sup>職業的を</sup> よい口か、ありさるものなので、

当分東京に出るには断念し、帰宅した。と23か、折紙  
4月上旬 東京の下宿完了、<sup>おの</sup> 講師の依頼が来たので、今  
う校から 帰郷したは、<sup>おの</sup> 断った。おの 腰をすえて

自定で研究に決した。

6月 「10-1の曲を掛ち、しかし 互に展南不能」(英文) を発表、これは <sup>おの</sup> ~~おの~~ 簡単を具体的实例の

Klein Liu

し、しばしば <sup>おの</sup> 用いさる。

この年によく勉強した。 Klein, 1-10-12-19 Lie

秋、船長と共に出張して、カキヤウカ 塩釜の許可を争く  
露の作りの

新橋の商人等々 一団内  
も帯在して、毎

大日本水産協会とかいふ所で、  
赤坂の溜池の傍にあった  
(その池は29日村の池)

いよいよ用が済んで帰る時、林先生をお伺いして、  
先生は全く商人風な私の方を見て、驚かされた  
らしく、十数年の付き合い、その時の話が色々  
出てくる。

かやうな用務 何の私には向かないが、仕方のために、  
読者のために、文章 29日は荷取の代りであった、  
「第一狼多集」、花袋の「一兵卒」、正室の鳥の「何処へ」、「世間並」

職業的の才の 12の才のついては、また不安な事、  
29日は全く不安の時代であった。

Klein-Lie

少しは書きのついても判り ~~書きたり~~ した身か、  
大いなる進歩の中、影響も受けたら  
ドイツ Klein, 1-10-12-19 Lie

















祖母の病

ええ、  
 私の留学期間には三年位 ~~研究の中心は~~  
~~な~~、一年半をフランス、後の一年半を  
 ドイツで過ごすつもりだ。しかし祖母は  
 病弱で、留学中の祖母が、~~ジーンズの~~病で  
 悪くなった。その通知が、四月ごろの届いた  
 電報で、内容せつりに、直ぐに帰る必要  
 はないが、あまり長く留守にしておくことが不可  
 になったので、大体往復と入札の場を  
 決めた。

物理学科長の  
 清水武雄君は  
 好帰口になり、

最初出張の際は研究所の事務は必要  
 送金などのこと、の車が足りない。私費と  
 研究所の事を電報で帰ることにした。金  
 づから、ドイツに滞在せず、アメリカに  
 帰る。

8 (1)

研究の  
 古本やを蒐集して  
 古本はありを  
 入札の場を  
 決めた。

帰国の途  
 お金船の  
 準備  
 (11月26日)の  
 大総領

民主主義の国フランスの文化の高さが私の心を打つた  
 が、

わが国の文化——  
 科学の水準  
 科学の大衆化  
 環境に必要を  
 大切に  
 10月も立たない中に、  
 帰りの船に乗った。



帰朝直後 (大正11-14)

1922 (大正11年) 1月中旬 神戸へついで、直ぐ。  
~~自宅へ帰る。~~ 祖母の健康を欠て一字の心。  
研究所はまた申さずしてゐない。清水武太郎君と;

石橋へある大改巨大豫科の~~書~~を借りて、推  
見研究所の研究を開始した。(この秋は岡谷君の帰って、  
私の留守中 1920年 (大正9年)には大改巨大~~書~~の

事だ、~~←~~ ~~→~~ 市場の~~前~~。

研究所には他からの寄附を求めなく、私がこれ:

企画してゐたのを、数学部~~に~~、~~作~~作の~~こと~~に~~は~~経

不可成である。また留守中、豫科の~~書~~教授

の有力~~者~~は他~~に~~な~~ら~~な~~か~~つた。 講師

が、私は~~物~~豫科の研究をつつや~~と~~して、  
や~~ら~~な~~か~~つた~~事~~を~~後~~に~~述~~ぶ~~に~~。

岡田良太郎

4月から~~大改~~巨大豫科の豫科はじまる。各三  
科へ三分取るので、同じ豫科を三回履修するね:

なすね。(三年を三~~回~~履修) 実用解析、統計、~~大改~~

~~二年~~ 三年 を持ち~~上~~が~~ら~~な~~か~~つた。

(実用解析、統計)

実用解析では図計算、1モジュールをや~~ら~~な~~か~~つた。  
した。これで~~大改~~巨大~~の~~研究は、~~統計~~の~~研究~~に

大改

2月から~~大改~~巨大豫科は三年修2500円、~~大改~~研究  
所は2500円以内、これは4900円豫科を上  
める事になった。

1922  
1884  
7879

三守先生に~~後~~に~~述~~ぶ~~に~~。

この年の夏と~~秋~~の夏、~~大改~~巨大~~の~~研究は

講習会の依頼された。1922年は掛谷宗一博士

と一っしで、東京、高松、豊後を巡つた。各市で四回、

私は「口計算と口表」として、





12

私は柳先生にお恩返しのため、

小林文子で、「お母教育の根本問題」を書き上げた。小原さん~~の~~と23から刊行した。~~(1924)~~ (大正14)の3月であり、40歳の春であった。これは中野学校を主として書いたが、小原さん~~の~~が責任者か、小原校の方へ意外に大きな影響を及ぼしたらしい。これが柳先生と、小林文子~~と~~中野校~~と~~の間から、お母教育の講演や講習を~~おこなった~~ことになった。

の大部分

この年(1924)は「統計的研究会」の発起に尽力したが、翌1925年(大正14)の春頃、村正中から健康異常を訴えよるようになった。村正を~~病院~~や~~谷~~や、城崎温泉に~~保養~~せんとして、5月10日の朝、八軒坂の電車に乗る筈なのに、静養中へ~~送~~つて書物を買った~~こと~~のため、一駅先おくれで10~~分~~の電車に乗ったが、豊岡・城崎地初の大急ぎのため中途(谷)で降りた。もしあの時、~~電~~の~~遅~~れに乗ったならば、それはちょうど城崎に到着したばかりの時に、震災を起った~~こと~~の大層であった。

この6月には「統計的研究会」が刊行された。その月の30日には、清水武敏氏~~の~~車大に録音されたが、私が、所長所長とされた。その健康が憂うこととなり、その秋から肺内淋巴腺炎のため、半年間病臥した。

また「統計的研究会」の村正中、京都大学経済学部の身で、大谷院の~~研究~~であった。蛸川虎三君と知合いたり、~~非常~~に~~好~~ま~~れ~~た。おたまたま、それ以後は、君の、マナカの、デーヴィーの「~~経済~~統計系図(蛸川)要」(同1924年11月)をお送り、~~私~~は~~病~~臥した。少しお手紙して、~~お~~の~~病~~が~~漸~~く~~向~~う~~な~~った、のは嬉しかった。

お母の~~病~~が~~漸~~く~~向~~う~~な~~った、のは嬉しかった。  
柳先生

1924年、~~大~~谷~~院~~の~~研究~~会~~の~~中~~に~~、~~蛸~~川~~虎~~三~~君~~と~~知~~合~~い~~た。お母教育論(河出書房、1927)の中~~に~~、~~こ~~の~~事~~が~~記~~載~~さ~~れて~~い~~る。

私と22  
大衆化、  
平均化のため、

これは統計的研究会の一側として大谷院の  
蛸川虎三君のお手紙の一部

私がお母教育やお母の大衆化をはかっ  
ておる間、私書1924年~~一~~次~~出~~した~~こと~~で、~~私~~の~~補~~助~~の~~~~功~~を~~大~~に~~示~~した。これは、ホイットカーの研究の批判が~~不~~満足~~な~~ものであった。  
それと、その~~後~~に、お母大谷院~~の~~君の、車大に~~録~~音~~し~~た。お母大谷院の、デーヴィーの、マナカの、~~研究~~会~~の~~中~~に~~、お母大谷院と私の研究からお母に、お母を~~も~~つ~~た~~ら~~し~~め~~て~~あげ、



(\*)  
13

私作した、~~...~~ 新興の量子力学の方向を知らしめたのが  
あつた。毎年の如く  
安静をつつきの  
外は卒した。

病休中 (1926) 昭和1年 1月

~~1926 (昭和1)~~ ~~1927 (昭和2)~~

増大研究所の新落成だったが、この落成式への  
出られなかった。

5月31日 病気のため大正医大豫科教授を  
辞して、研究員主任となった。妙なことに  
研究員主任となつて、年俸は5000円となった。

医大を止めたいので、東北大学の助手時代から  
あつて15年 ~~...~~ 官を更迭して、(恩給つ  
つく身となった)。

42歳で

これがせめて  
研究員の出発点

(1928) (昭和3年)  
この年が望 (1927) [昭和2年] ~~...~~ 生活を送る。何時まで安静をつつきのわけにも  
大休養を

夏期は ~~...~~ 海畔に静養した。

私は病向を見ては  
読みかけたが、

この頃は 量子力学が創りにけりしめられた時程に  
ド.プローイヤー、シュレーディンガーに  
なつた論文を  
健康に悪いつて、止めてしまった。これは病向に

かゝる云々難解な論文  
は

「量子力学の発展」の責任論等をわづらした。  
長い病休中には、~~...~~ 法以外の法がなかつた。

トリストイ、ドストエフスキー、ロマン・ロラン

の名著、ルイ・ジエール

その他 文化史  
藝術史

経済書

トリストイの「藝術論」の読みの方向が即ち論  
トリストイの偏狭を考へには相違ない、それにもかかはらず  
ヒューマン・サイエンスの強い認識は、十分私を感懐させるのが  
アインシュタインの攻撃

~~...~~

(1930) 昭和5年の

2月-4月 「アガシ社の子」(恩格) である。  
 24日 フリスの礼 16世紀のおおのふりての  
 起るころから、池田王政、大革命、ナポレオンまで  
 行く、フリスの礼の歴史(おのふりて)の歴史、全く  
 のデッサンである。 フリスから始めるとは(文献上  
 の都合) 塩欠理化学研究部はその世界  
 上、若年史や若年の古典などを多く蒐集する  
 部を持つていたので、大部分は私費であった。こ  
 ろころころはアトロー「フリス口」の「民の歴史」と  
 いふ大部の「史」の中に、「私年史」が、あつたが、  
 (内容の) 成り立ち、しかも(内容の)  
 深みにあつた。 他、同じく(内容の) 深みにあつた、  
 なかつたが、(内容の) 深みにあつた、(内容の)  
 人々不可成にあつた。

それと、これと直接に原書をつくらなければならない  
 である、しかし西洋の古いおのふりてを  
 のは、多額の費用を要するから、又定年  
 高にせよ、私の研究部や私費では  
 無理だし、日本内地の各高等大を採り  
 大したことはないのである。

昭和社版「経済学全集」の計画の内、表理部

これ、私に任せよう、林、三上両先生  
 の前の小使、おのふりて、  
 2の秋のころから日本若年史の蒐集をはいか  
 徳川時代の若年史、明治時代の若年史  
 かに、中世の若年史の蒐集をはいか  
 戸部 昭吉 さんを知ったのは、そのころであった。  
 20年 1930年の春5月には  
 職の物語

「アガシ社」の  
 計画の本意を  
 私に説明した  
 分、早速  
 した。

この項目をよつた  
 の、都合上  
 持理を「時系列の若年史」  
 獨創的な部分もある等である。  
 1930年のころは、池田の若年史の計画の  
 基。

しかしそれは可能である。  
 陽々 池田の若年史  
 石井 さん、  
 10月には、  
 おのふりて、  
 おのふりて、  
 交際部もやめた。  
 なく止めてしまった

(1931) 昭和6

さてこの1931から翌年にかけて、私と共々起き大東  
大阪帝国大学の創立、~~予~~予学の実現と、  
塩見理化学研究所との関係 ~~等~~ について、

大阪帝国大学  
は1931年創立を  
見たので

前1930年(昭和5年)柴田善三郎氏が大阪府知事として就任した時、  
予学は大阪総合大学案を打って、研究所 ~~等~~ の協力を  
求めた。その結果、1931年5月 40万円を研究所の基金の中、

予学管理に研究所設置の趣旨より、大阪予学予学  
の創設費とに附せし、そのとき条件として、  
(1) 予学の ~~等~~ 予学を大阪帝国大学の委託で、  
(2) ~~予学~~ 予学以外、本研究所所長が研究の備後は予学  
の都合の外 研究費経費の支給しないこと。  
この二点に、大阪大学校長長岡 ~~等~~ 予学を提出した。

1933

予学管理内  
次以下の

広島文理学部大学の礼の講義

広島文理学部大学は(1929)昭和4に南学からこの  
専攻科の学部の三学年に「古事記の古事記考」  
といふのがあり、一単位をなす。この ~~等~~ ばいめ  
の講義を ~~等~~ した。

5月 ~~等~~ 10月までの間、三回 ~~等~~ 分けて、前学を ~~等~~ いて  
70時間は ~~等~~ の講義をした。古事記、古事記考、  
9月 ~~等~~ 半はおおむね ~~等~~ たいの古事記考と

この講義の中、古事記考史に ~~等~~ 増訂して、  
広島から帰るに、本 ~~等~~ 雁 ~~等~~ の ~~等~~ した。  
11月1日から3日、日本学術協会第七回大会が大阪  
の南から、私 ~~等~~ 予学 ~~等~~ 関係 ~~等~~ した。大阪毎日新聞  
社の講義で、三上 ~~等~~ 夫 ~~等~~ 人 ~~等~~ 「日本古事記史の特色と印鑑」  
との ~~等~~ 講義 ~~等~~ を ~~等~~ した。 ~~等~~ 三上 ~~等~~ 夫 ~~等~~ 人 ~~等~~ の ~~等~~ 講義 ~~等~~ した。

11月1日から3日、日本学術協会第七回大会が大阪  
の南から、私 ~~等~~ 予学 ~~等~~ 関係 ~~等~~ した。大阪毎日新聞  
社の講義で、三上 ~~等~~ 夫 ~~等~~ 人 ~~等~~ 「日本古事記史の特色と印鑑」  
との ~~等~~ 講義 ~~等~~ を ~~等~~ した。 ~~等~~ 三上 ~~等~~ 夫 ~~等~~ 人 ~~等~~ の ~~等~~ 講義 ~~等~~ した。







さて和算<sup>書</sup>と中国数学の研究の向う、この年  
も暮れて 1933 (昭和8) 年になった。

春も早い<sup>と云ふ</sup>若狭の哲学講座のため、三木晴氏から転  
まよて 「イテオキ」の先生(数学)を書いた、  
5月、熊本へ来た。 ~~10月~~ 10月に 上京した。

大塚の  
研究

拓正教授の題名も5月間は  
統計学の講義のため、

23日たこを浮けば、この年は全く日本の  
中国数学史の勉強も暮れたといえる。この

7月本から 椿屋泉 ~~椿屋~~ 椿屋在中、と海岸の  
日光を ~~東~~ 九州の海沿い 椿屋から

「九章算術」や「算学啓蒙」を熟読したり、~~大塚~~ 大塚の  
湯 龍神温泉に友人とで帰った思い出  
も。 ~~大塚~~

さらに「和算のおける数学の国際化と産業  
革命」(中央台論, 1934, 1月号)

秋の  
たこ  
京都の  
龍川の寺に  
おいて大塚  
私に数学史  
を語った。

「支那数学の社会性」  
— 九章算術を以てして 李煜堂時代の社会性

(改定, 1934, 1月号)  
の二稿を書いた。 ~~この~~ 10月の稿は日本

よりも中国で読められたらしく、~~文~~ 文のついで天津  
の新聞(7月に在り)「大公報」に載せられた、~~かつ~~ 編者の

評を加えられた、~~前の~~ 前の稿は ~~雑誌~~  
雑誌か、お

「世界思想」  
29  
大塚の著者 張申府  
清華大学  
の張申府  
の稿

上にある「学藝」  
(3月号) 南京の (3月号)

外の稿は ~~張申府~~ 張申府の稿と  
一稿の雑誌 ~~張申府~~ 張申府

この附記には、私の仕事を ~~お~~ かなう行く、しかも正確に  
~~大塚~~ 大塚の著者、小倉伊兵衛(Kinnosuke Ogura)は日本一位 ~~極~~  
可敬愛的学者、本刊創刊之初既に紹介した。 ~~とある。~~

この中の大塚の ~~著~~ 著者たる数学論文と記書の外には、~~大塚~~ 大塚  
全部の著者を挙げた。この五年以来西洋数学史の  
研究の発展性を研究して来たが、... 今その研究を中国 ~~大塚~~  
に移したことは、まことに喜ばしい感打つきである。 ~~大塚~~

大塚は日本の  
数学史に  
関心がある  
と思つた。

大塚の  
著者



~~経済の中心は、<sup>22</sup>10月 雑誌『教育』に  
掲載された。~~

この年の夏 阿蘇の夏期講習会に参加した。  
この頃は幸い健康がよかつたので、おみ子同伴  
で九州を巡回して来た。大分から船で別府  
に行き、おみ子と湯まで阿蘇の栲の木温泉へ  
行き、三日は有り湯帯在に於て、内の牧に行つて  
講習会をつづけ、おみ子と熊本へ出て、人吉温泉へ一  
泊、霧島温泉へ<sup>かたつ</sup>10日は有り湯帯在の上、  
鹿児島、指宿をめぐり、青島~~温泉~~へ一泊して、  
大分から船で大分に帰った。

11月 岩城の「教育講座」のため「計算技術の  
シモダマ」を書き、つづいて「日本教育の歴史  
史略」使「師範大学講座」のため を書き、~~休み~~  
に南伊豆の<sup>又路の</sup>下加茂温泉で、最後の稽古<sup>年奉の</sup>  
続けた。

(1935) (昭和10)

この年は岩城(講座)の「教育研究」を書い  
たりして、満50歳を印した~~この年は妙に~~  
親しい人々を失った。1月には廣島の新宮恒  
次郎君を失った。

決定  
文相 2向は、  
松田 澄山氏  
大分へ来たので、  
教育改革の根本  
改革を行つた。  
と、新聞に出た  
が、その改革の  
~~内容~~ 内容的  
なものを  
思はせよう  
と、私は  
の

~~松田 文相~~ <sup>又路</sup> 教育を防いだために、「~~教育~~  
教育の進歩的」を起稿した。(中央公論、7月号)  
松田氏の「教育改革を行はなかつた」とは、おし  
う幸であつたせつた。

~~松田 文相~~ <sup>又路</sup> 教育の改革の方向  
が、私に ~~ついて~~ 来るお学若は一人もあつた。

大分 関西の 嵐風のため  
の大災害を受けた



(1937) 昭和 11

二・二六事件の前後、長く病床におった。  
「書史研究」を送った。三人の子生—  
学生坂田良次君(佐々木部員)と伊藤君、内山正三君(経理部)  
若原山に若太郎(若原部)の三人—伊藤君、坂田君  
君(若原部)も参加—で、~~●~~ 堀見研究所の私  
室で、私史の会を開いた。半年もつづいたであ  
らうか。

~~開催~~ (会は中野区村野会館の主  
であった)

7月まで阪大夏期講習会が~~●~~開かれた。そこで  
私は「日本の近代的思想の成立」と題して、  
六時間の講義をした。

24日~~●~~ 堀見研究所の堀の場へ滞在し、日暮から惣島  
の~~●~~ 山へ二人を~~●~~ 連れて帰った。

10月には、すみ子~~●~~ 同伴し、帰りは上野方面  
(物産博覧会)の最中、上野の~~●~~ 公園で開かれた  
長崎県中野区青年会主催の「青年講習会」に出席し

て、帰定した。  
平野君と山崎君は、この講習会に出席し、  
その後の講習会に出席した。

それから直ぐ「自生研究者の任務」を起草  
した。これはアセミアの防衛のため、自生研  
究者と社会研究者の役割を明確に述べ、  
を説き、その際、私的的精神の~~●~~ 発揚  
を主張したものである。論壇には多くの反響  
があったが、実際的には無力~~●~~ であ  
った。

正統的な自生研究者の例として、これを挙げた。

趣味 小説 学生をたから、  
を捧ぐか、  
を捧ぐか、  
を捧ぐか、

中国の劉君の  
研究の  
九州  
大阪の  
便宜を  
私生活  
中口人  
よから  
私生活  
中口人

青野君吉氏は「小倉会」の「自生  
研究者の任務」は、正確すぎる位の正確な  
自生研究者と社会研究者の「精神的  
同盟」の提唱は、もっと具体的に  
定まらねばならぬ(時常板)  
これを論じて奮起する自生研究者は、  
研究者であるが、と評した。(東京朝日)



1

# 第五章 大正時代 その一

私は1917年(大正6)三月、33歳で大阪に  
来た。[大阪府立]大阪医科大学の塩見理化学研究  
所[?]の主任として。大阪医科大学は大阪

女子医学部前身で、塩見理化学研究所の  
主任として、[?]の主任として、その由を  
[?]におかす。[?]は[?]の主任として、

大阪医科大学のこの内容を述べると、いよいよ  
変はつて来た。大正三年に、修業年限  
を三年、三年、四年とし、大正四年に「府立大阪医  
科大学」と改称した。大正五年十月には本校  
の学生塩見政次氏が、[?]の主任として、  
塩見理化学研究所を設立し、その主任を大阪  
医科大学の主任とした。当時の学長は佐多愛彦博士  
で、塩見理化学研究所の主任も彼であった。

研究所の主任として、[?]の主任として、  
佐多博士から招かれた。いよいよ[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

4月上旬、[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

5月、[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

5月、[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

佐多愛彦 校長  
塩見理化学研究所 主任  
[?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?] [?]

(注) 塩見理化学研究所の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

大阪の中心地は、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

大阪は大阪の中心地として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

猪名川の堤防の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

で経営の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

「塩見理化学研究所は大阪の中心地として、  
一生の研究所として身を置くことに  
おぼつかない。以上を念のため、佐多博士の  
快諾を得たのである。(大阪毎日新聞)

病院も大学医科の[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、

池田町は昔は銚子の産地であったが、その頃  
はもう産地ではなかった。しかし、池田町には、  
酒の産地であった。[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、  
[?]の主任として、[?]の主任として、





「改造」誌上で大森實右郎氏の「まてりあつたかみり  
たんち。——土方兼作の「西洋主義の199克服。土方  
兼作の唯物主義の批評」(1927)など。これらは、  
社会制度の発展性については、多少の誤りがある

前々から申し立て通り、私はマルクス主義については殆んど  
何も知らなかつた。だが、新聞雑誌によつて、  
大森氏から私の知れぬところを知り、  
凡そ「たが」なところを感じさせられた。

と云ふ。フーバーの「歴史」を讀んで、さういふ意味で「藝術の  
発展性」の道が、  
「若者の発展性」の気が付  
いてあつた。  
私のもつて前々から  
「歴史」の道が、  
「若者の発展性」の気が付  
いてあつた。  
私のもつて前々から  
「歴史」の道が、  
「若者の発展性」の気が付  
いてあつた。

2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28) 29) 30) 31) 32) 33) 34) 35) 36) 37) 38) 39) 40) 41) 42) 43) 44) 45) 46) 47) 48) 49) 50) 51) 52) 53) 54) 55) 56) 57) 58) 59) 60) 61) 62) 63) 64) 65) 66) 67) 68) 69) 70) 71) 72) 73) 74) 75) 76) 77) 78) 79) 80) 81) 82) 83) 84) 85) 86) 87) 88) 89) 90) 91) 92) 93) 94) 95) 96) 97) 98) 99) 100)

(2) ところが、どこから聞き  
つけたのか、大阪毎日新聞  
の記者が、  
休んでしまった。その新聞を  
見たというが、未だ見  
三木清氏から手紙を  
頂いた。

これは若者の雑誌には  
何ら不向きと思はれ、  
左場方面などに知人が多く、  
幸い改造雑誌はアイゼンシュタ  
インの著述が、  
一文を載せた。これは、  
「改造」に  
送ったのである。半年  
経たぬうちに、  
思ひに寄せた方が、  
世間的に  
なつた。

それが今では、  
フーバーの「歴史」に  
社会的発展性」に  
示す。

~~山本宣治氏の  
代了氏の  
の雑誌を  
(3月) 刊の中で  
きたり~~

(1929) (昭和4) (45歳) なる。新刊  
1月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

11月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

12月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

6月 「藝術の社会的性」を著す (雑誌 7月号)  
その中から、  
7月 「発展性社会の発展」 (雑誌 8月号)

11月 (2) 植民地時代の  
発展性 (思想 8月号)

12月 (3) 植民地時代の  
発展性 (思想 12月号)

1月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

2月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

3月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

4月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

5月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

6月 祖母 (脳溢血で) なくなつた。  
享年 85歳。葬儀の日、私  
母の口をこちへ中庄を  
たてた。

# 第七章 日華事变から戦後まで

(1937)昭和12

東京移住の初期

日華事变の  
23

6月末日 東京、杉並区馬橋に移転す。(この家ははじめ借ったのであつたが、一年の住んで貰って貰った) この新しい家で、常々から東京に出ていた息子夫と同居おこした。この3月に孫の欣一が生まれていたのだから、この日 林はおちいさんと呼ばれ居た。

長女は、福井県人土井敦子と結婚し

向もなく7月上旬に『評語集』「種々の精神と若くは若くは」を刊行された。これは大阪の「おけい私」の精神生活を代表する著書に合致するのである。一面私思想の推移の跡 思想史を語る。私思想の移住を期して、新しき人々の生活に、右人は、右方面の方から、「新LP会」を開設したのには意外だった。これは「新生活と祝賀会」

わつとい、私思想の表いの一いある

同郷人、出版関係、物産子村関係、数学者、評論家、  
官吏、左の右の左に、  
館村丸喜次郎人

二、三の、伊藤、吉田、

日華事变の勃発になったのは

8月上旬 長野県の上田中で数日わたる講習会があったので、私はおちいさんと共に伊藤君と上林温平と帯在し、これから講習会へ行った。この間に各駅で宣伝を見た。

10月には大阪、阪大の講習会を(毎日つづけて)帰つた。また12月からは物産子村の講習会を(毎日つづけて)帰つた。

日華事変以来言論~~の自由~~はますます封~~鎖~~  
し、~~言論の自由~~ 壓迫を加へて来た。かよる現状

この現状の下においては、大学の階級性などには  
勿論のこと、私の専ら史研究の体についても、何

らかの力をつけても施すか、テーマを変更~~する~~  
けしは、従来史~~研究~~の~~中心~~を~~な~~て来た。(太平~~の~~ ~~かくし~~)

国史の

戦争に入らぬ前か、むしろ「史研究」第

一巻と「科学的精神と教育」とは、増刷

を禁止した) ~~史研究~~ ~~の~~ ~~中心~~ ~~を~~ ~~な~~ ~~て~~ ~~来~~ ~~た~~

書店の  
から

29年から  
(1938)  
春にかけ  
昭和13

「~~日本~~」私は ~~史研究~~ の論文を書いた

「日本書学の特殊化」(中央, 1938年10)

「~~支那~~東洋の特殊化」(中央, 1938年10)

「支那書学の特殊化」(科学, 1938年5月)

を書いた。これらは皆、合理的な研究であって、  
決して特殊~~な~~ 都合した ~~見~~ 付けで、神秘的な~~説~~ ~~を~~ ~~述~~ ~~ぶ~~ ~~た~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~か~~ ~~っ~~ ~~た~~

を述べたものでない。

「~~支那~~東洋の特殊化」(科学, 1938年5月)

を書いた。これらは皆、合理的な研究であって、  
決して特殊~~な~~ 都合した ~~見~~ 付けで、神秘的な~~説~~ ~~を~~ ~~述~~ ~~ぶ~~ ~~た~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~か~~ ~~っ~~ ~~た~~

を述べたものでない。

「~~支那~~東洋の特殊化」(科学, 1938年5月)

を書いた。これらは皆、合理的な研究であって、  
決して特殊~~な~~ 都合した ~~見~~ 付けで、神秘的な~~説~~ ~~を~~ ~~述~~ ~~ぶ~~ ~~た~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~か~~ ~~っ~~ ~~た~~

を述べたものでない。

「~~支那~~東洋の特殊化」(科学, 1938年5月)

を書いた。これらは皆、合理的な研究であって、  
決して特殊~~な~~ 都合した ~~見~~ 付けで、神秘的な~~説~~ ~~を~~ ~~述~~ ~~ぶ~~ ~~た~~ ~~こ~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~か~~ ~~っ~~ ~~た~~

を述べたものでない。

「~~支那~~東洋の特殊化」(科学, 1938年5月)

支那史  
を述べた

一書は  
ありて



4

（お茶の 大衆化についで）

これは私の『お茶の 大衆化』の序文である。  
「わが国は民権の向上、何れも私達の精神の  
くさりを革新的な見方、考へ、取捨を一つ、廣く行き  
わたらせ、しめさせたい。あるよゝ一合から、この書物を  
書いた。そして、私達の生活の豊かさを  
家計の向上、三つの題目を掲げ、それらについて  
述べた。お茶の準備と戦いには、せいぜい中村や  
女村や室井等の二三の村を以て……」  
ふたつは、お茶の準備と戦いには、せいぜい中村や  
女村や室井等の二三の村を以て……」

と序文の書いたが、科学  
精神も付いた、  
実証性、合理性、  
という  
三つは、この序文の  
この本の特色は、  
科学的な見方、  
科学的な見方、  
科学的な見方、

この本の出版と  
関係し、  
お茶の大衆化の  
方針をいふこと。

お茶の大衆化の  
お茶の大衆化の  
お茶の大衆化の

左に月下旬 大塚お茶会。「お茶教育の  
大衆化についで」  
10月中旬 物置村同窓会。「お茶の  
大衆化についで」  
この年は 共立社が備忘のため「お茶教育の  
再建」を  
書き、12月の小石川の女村附居十村のお茶  
研究会で、「お茶教育の再建」を述べた。  
この夏、伊香保「お茶の再建」を述べた。  
二月の序文には、私達の伊香保にある、  
お茶の再建の

お茶の再建の  
（1939）昭和14 となつた。二月の中旬から、  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の

お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の

お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の  
お茶の再建の





8月 日民学術協会 <sup>で</sup> 講演 <sup>第一回</sup> 現代文化の内面 <sup>を</sup>  
を以て「教育の革新」を説いた。同協会ではいよいよ  
246年を記念して、「学術の日」を掲げることにした。

10月「岩波全集」の一編として「計算口表」を刊  
行した。これ好評であって、<sup>技術者の向うに</sup> 10月の大講義では、<sup>計算口表</sup>  
20時間、そのあと「明治時代の教育—  
の6時間の講義の後に

日民学術協会の  
主、両宮藤蔵君  
が偶々いふ  
事だ中々ので、

加つ、これを協会の「学術の日」の一編とすことに  
した。

これより先き、この夏に三木清氏の紹介で、同氏  
の中学時代の 滿洲日民生部 ~~で~~ 編輯 ~~の~~ 教科書  
の主任となった、それで 三木清、石原純、山本有三、  
等と一帯、滿洲日民生部 ~~教科書~~ 編輯 顧問  
された。11月についで、師範を採用する教科書

三本、石原 二氏は  
滿洲日民生部の  
主任の ~~任~~ 任 庫に  
行かなかった。

いつか協力を、この編輯の助力を求めた。しかしこの  
南行から、空しく帰る人解任とあつたので、私の仕方は  
ただこの一種 ~~の~~ の しかなかった。そのときも 頼 た  
とせ、私のこの編輯 の い い の 向 した が、  
滿洲日民 生活 を 共 に せ ず、上 から 件 事 を 知、お と 等  
口民 い、詳 しく 情 報 を 知 せ た、

— 例は：清の聖祖や  
明安圖のよるな —

知らないあつた。滿洲 の 中 日 史 の 力 を  
若 い の の、編輯は滿洲の教科書の  
中日史 の い の 何 も 知 ら な か つ た。これ を 以 て  
日本 に し よ う と す の い は 物 も 無 い の、あ ら う。

と人をいふが、  
悪くおと母校の  
い聞ふ。

10月 日民学術協会 理事 に な つ た。前 の 理 事 会 は 藤  
藤 君 を し た が、この際、せ い 私 に 出 て 書 い たい と い ふ。  
日 本 は 盤 翼 整 政 の 呼 び の 声 の 高 い と き て、左 の い  
物 を 私 の 獨 裁 制 に よ り て い つ た 調 子、  
同 理 事 会 長 を い め る 人 の 清 は た し、中 に は  
多 年 の 友 人 黒 須 康 之 介 君 一 招 き て 村 に 來 り て  
大 學 校、私 の 最 も 早 期 の 講 義 を し た、藤 君









1943 (21)

*[Faint, mostly illegible handwriting in the top section of the page]*

1943  
22  
21

私に好い、  
「カ倉君、君が来て大  
掃除をして下さると  
いいなあ」

1922

1941

*[Handwritten notes and scribbles, including a signature]*

母  
校の女に果して  
フランスと名づけたら、  
自分では判定を棄たさうと  
思っている、  
その上、  
そのついでに私は二十一  
歳のことを、  
取り直さうと  
中村精男先生  
に書きた  
おかし  
な  
こと  
を  
や  
り  
出  
し  
た  
大  
女  
子  
の  
研  
究  
の  
自  
然  
と  
心  
の  
よ  
う  
に  
な  
っ  
た  
た  
か  
様

何より私が私生活の困窮といふことでした。

感じました、  
たか

この三ヶ月間私に母校の

に書きた  
おかし  
な  
こと  
を  
や  
り  
出  
し  
た  
か

中央公論社の記事の中で、「日民学村」成功を助けたのは、教師を協力的に復帰させたから。  
これは私が、  
たぶん」といふ意味のことを書いたのが、時を移して、~~陸軍省~~陸軍省の反感を買ったため。  
ある記者から聞かされた。私はこの言葉をきいた。しかし

11 2222  
一方、昨年

あたりから、私は  
ジャーナリズムの世界から全く  
離れようとした。  
20より先、昨年  
1942年の夏「民生」誌上  
に執筆 糸川嘉六氏  
の論文からはじめた、  
神奈川県事件といふ、  
人権蹂躪 同様に  
がある。こゝでは民生社、  
中央公論、その他の社説が  
多く、拘禁された。  
そのとき 官憲は

辞し、11月には 執筆も止め、  
「日民学村」から

自分の手をついてしまった。  
~~私は私の大如き筆~~  
官憲にはせいよあった。それは

~~新日本に身を投じた~~ 私は又筆を止めた。  
作られた。2222年になり、反共者から下降の

この年 9月に日民学術協会で「戦時下の教育」  
和学村 藤子村 一期の工場の、カリフォルニアの

話をしたのみで、何も書かなかった。その翌年(中記)  
の外、お金の浮揚を促し、

「日民学術協会」  
から送られた。それは

(1944) 昭和19 2月の完成したので、中央

公論社が、発行 ~~した~~ したので、

この1944年の春は、戦争の経過を思い、自分の  
手で、政文で書いたお金の論文の整理をした。誤り

お金の論文の整理は、少しお世はよくなった。  
訂正を加えた。

官憲の力

7月 2222

中央公論社が 解散 するので、「戦時下の教育」  
は 新元社から 出版 された (12月の発行)

全部村の位  
である; 2222

私の家庭にも、一人は日民学村二年の生だし、  
お一人は戦争から 入るしなけは: 来た ~~うじ~~  
2222年 官のサイバに上陸した。私は東京は 押入に ~~うじ~~  
8月 2222 両田市 陸南の ため、去来した。

4月  
春から 学歴 陸南

13 3人、女中一人 ~~うじ~~  
お世はよ

6月 18  
3-

用を  
持た  
身にお







14

一方、折居の定か 7月25日の新聞には、直人

は、まに 妻との約束 ~~を破る~~

8月14日の夜は B29 が 雲霧の上を飛んで行った、

~~この時折居は 215日 在 秋田県~~ (土崎塔を 火撃 撃お 撃お

よく聞えた。

そして 8月15日(土) 直人の約束 この日は 何ヶ電大を  
放送 かが あり ことな  
ので、

折居が 渡南した 丁 文 滞 一 年 前

折居は

正午十二時

折居、隣りの 老人 と ~~い~~ いっしょに、

ラジオの前を 歩いた。





本並馬橋  
二の二三

小倉金之助殿

東達

社 法 團 人 日 本 放 送 協 會

東京都千代田区内幸町二丁目二番地

電話代表銀座 (57) 七七五二・七七六一番



一 数学者の回想

口述 下書

